

平安宮廷儀礼の政治文化

末 松 剛

はじめに

平安時代の宮廷儀礼が担った政治的・文化的役割について、摂関政治の展開との関連を検証することを通して論じてきた。それは儀礼を儀礼の問題としてのみ理解するのではなく、儀礼の実態から政治との関係を読み解き、儀礼の歴史的意義を追究することである。そのような広がりの意味をこめて「儀礼文化」と称している^①。

儀礼は秩序の確立作業であるから、政治史研究や制度史研究によって解明された摂関政治の実像に留意し、儀礼文化の解釈が突出することは慎まなければならない。よって、その結論は政治史研究で指摘されていることの再確認となる場合も当然ある。とはいえ、儀礼文化に着目したからこそみてくる政治の展開もあり、儀礼を通じて発動された権力や権威付けを考えることも可能であろう。儀礼と不可分な政治の問題は、古今東西みられるものであり、とりわけ武家政権の成立以前である平安時代は、政治と文化の中心はともに宮廷社会にあった。宮廷政治やその担い手を主題とする文学作品や美術作品が、古典の名にふさわしい高度なレベルで輩出されている点にも留意すべきである。

このように平安時代の宮廷社会は、政治と文化とが不可分であり、その密接な関係は政治文化という視点で平安宮廷社会を捉える可能性を示唆している。そのためには政治的・文化的意味を併せもつ宮廷儀礼の分析こそが有効な

手立てとなるではなからうか。

そこで本稿では、平安宮廷社会の政治文化を捉えることを企図して、前半では、これからの宮廷儀礼研究において留意すべき史料批判の問題をふり返り、文学作品の史料的有用性について考察する。それをふまえ後半では、宮廷儀礼における裳唐衣装束について政治文化の視点から論じてみたい。⁽²⁾

一、平安期の宮廷儀礼研究の留意点―史料批判をめぐって―

(一) 古記録の史料批判

古記録すなわち貴族の日記が平安貴族社会研究の主要史料になって以降、平安貴族社会への理解は格段に進展した。文学作品をもとに醸成された、雅である一方、政治を顧みない貴族像や、政治の中心が摂関家の政所でおこなわれていたかのようないわゆる政所政治論は、今や払拭されている。古記録には、宮廷に勤仕した貴族の政務手続きや儀式次第が詳細に記されており、それらは口伝や教命、日記を通じて子孫に伝承された。平安貴族にとって手続きや次第に則って運営することが政治であったことが解明され、そのために「政務儀式」という一見矛盾するような用語が、平安貴族社会研究では通用している。

こうした研究動向を認めつつも、では古記録が常に客観的な記述、全体を捉えた記述であるかという点、そうでないことにも留意したい。古記録研究の進展が、貴族社会の人間関係や政務手続きなどを解明する手立てとなったことから、また大勢としてやや無機質ともいえる事実の推移が淡々と記されることから、客観的記述と捉えられる向きもある。

しかし、あくまでも個人の日記なのであるから、諸方面から伝聞した内容が含まれてはいても、やはり見聞範囲には限界がある。記主が宮廷政治家であるならば、記述の傾向が、その当時の政治状況と記主の置かれた立場を反

映することは、むしろ自然なことであろう。あくまでも個人の記録であり、記録の取捨選択に記主の政治的立場というフィルターが存したことを抜きに解釈することはできない。

平安貴族社会研究の進展をもたらした古記録研究の以前にも、古記録に着目した先行研究はみられた。そこではむしろ、記主個人を追究する視角によって分析されている。小島小五郎氏は先例尊重の具体相を精査して歴史的なものを解明する必要性を指摘し、『台記』を通じて藤原頼長の人物像とその歴史的背景を論じた⁽³⁾。また、時期的に前述した古記録研究と同じながらも、取り上げられる先例は記主の方針を対的に基礎づける手段であり、目的ではないという見方を明確に提示した、龍福義朝氏の研究もある。これらは記主の真意や置かれた状況に思いをめぐらして読解する必要性を示唆しており、古記録への史料批判という点においても、継承されるべき研究であろう。

(二) 儀式書の史料批判

儀式書は、本文を通読することで儀式の概要が知られることから、まずは読むべき教科書のような位置づけで扱われることが多い。特定の儀礼を論じた論考の冒頭に、『江家次第』などから一通りの式次第を紹介する場合は散見するのは、その例といえよう。

しかし、平安中後期の儀式書の多くは私撰儀式書であった。概要を知り得るすぐれた書物ではあるが、やはり私撰ゆえの偏りもある。摂関政治の展開にともなって、摂関や母后が御後に祇候することが、平安時代の三大儀式書とされる『西宮記』『北山抄』『江家次第』の本文にはみられないことは、その一例である。編者や編集方針にともなう内容という限界も併せもつことに留意したい⁽⁵⁾。

また、儀式書には本文では説明できない違例や私見が、割注や勘物として多数記される。割注は平安前期の勅撰儀式書である『内裏式』にすでにみられ、私撰儀式書になると勘物とともに大幅に増加する。すなわち式次第本文

とは違う趨勢が当該期の宮廷儀礼に生じていることを、割注や勘物は示している。政治史を反映した宮廷儀礼の変容を、儀式書の本文以外の検討から導くことが可能なのである。このような儀礼史料論としての視点を儀式書の分析に活かした儀礼研究が、今後は必要であろう。⁽⁶⁾

現在、古記録と儀式書は、平安貴族社会研究に不可欠の史料となっている。最適な校本が刊行され、フルテキストデータベースがインターネット上に公開されてもいる時代である。その有用性をより活かすための視点―儀礼史料論―が必要な時期を迎えているのである。

(三) 文学作品の史料批判―『栄花物語』を例として―

平安中後期には、古典と称するにふさわしいすぐれた文学作品が、宮廷貴族を担い手とし、宮廷社会を題材として生まれた。日記文学、随筆、物語文学と内容も多彩であり、それらを絵画化した絵巻物である。宮廷社会を舞台とするのであるから、宮廷政治や儀礼の考察対象となるのは自明のようでありながら、実はそうではなかった。

宮廷貴族像を長い間作り上げてきた女流文学や歴史物語は、古記録や儀式書による平安貴族社会研究にとって、克服対象であつたからである。そのため文学作品に拠らないことを公言する研究もままみられる。

大津透氏は、『日本の歴史06 道長と宮廷社会』において、「外戚政治や「後見」論は、『栄花物語』の一つの歴史観にすぎないのではないか、という疑問が生ずる」といい、「道長自身が直面していた現実の歴史はそれとは違っていた」という篠原昭二氏の指摘を引用しつつ、人間関係だけに頼らない権力の特色と構造を考え、宮廷社会のシステムを明らかにすることが求められている、と提言する。⁽⁷⁾

文学作品と距離をおくこの問題提起には、文学研究の動向にも起因するところがあり、大津氏は同書文庫本あとがきにおいて、「本書が『源氏物語』の内容にほとんど触れないことについて「作者論や準拠論などの歴史学に関

わるテーマもあるはずだが、近年の研究はテキスト論、作品の内部世界にのみ向かうものが多く、……歴史研究が受けとめるべきものはあまり多くない」とも断じる。⁽⁸⁾

また、『栄花物語』を専論する中で倉本一宏氏は、歴史物語というジャンル名が近代の産物であり過度に歴史書視することは危険であること、史書に見えない叙述について、作者の創作・意図的改変・不正確な史料によるなどのいずれかを判別するのは不可能であることを指摘し、「道長の栄華を賛美するための作品」であると論じる。⁽⁹⁾

さらに、そもそも文学作品には平安貴族社会研究が課題としてきた政治制度や政治史に関する叙述が、ほとんどみられないことも事実である。

たとえば『源氏物語と儀礼』という大著がある。⁽¹⁰⁾ 摂関政治全盛期の作品でありながら当時の政治状況をあれほどに醜化した物語から、どのような論文が報告されるのか、刊行予告をみて驚いた覚えがある。はたしてその内容は、前半が人生の通過儀礼であり、後半は儀礼において詠まれた和歌の研究であった。詳細な式次第の読解により、その実態と政治的意味を説明してきた平安宮廷儀礼研究とは、ほとんど接点がない。『源氏物語』にはそのような考察対象となる叙述がほとんどないからである。

同様のことは、『栄花物語』においても指摘されている。池田尚隆氏は『栄花物語』の即位儀礼に関する叙述が、大嘗会御禊を除いてほとんどみえないことを指摘する。⁽¹¹⁾ 平安宮廷儀礼研究が説明してきた高御座登壇や母后の関わりなど、摂関政治の本質に迫る事実に関する即位式の叙述は、『栄花物語』にはみえないのである。

以上の研究動向や事実起因して、平安貴族社会研究は文学作品と一線を画して進展してきたところもあった。平安中期の宮廷文化が大きな展開をみせ、古典文化が生成されたとの評価は共有しつつも、歴史研究者による文学作品の扱いは、依然として低調である。

これに対し本稿では、文学作品とくに『栄花物語』に着目して論じてみたい。前述した歴史と文学の研究動向の

乖離は制度史研究を深めていく研究段階であつたためであり、これからの儀礼研究には文学作品を含む儀礼史料論の構築が必要なのではないか、と考えるからである。

『栄花物語』が道長・頼通の摂関政治全盛期を経た物語といふのであれば、遡及して叙述された部分には史料としての扱いに用心が必要であるものの、道長期前後に達成された当該特有の史実を語る史料として、読み解くことは可能であろう。記事内容に偏りや誤解が交じることは、すべての史料に通じる問題であり、文学作品に限らない。とするならば、然るべき史料批判の上で、歴史物語の史料的有用性を追究し、平安宮廷儀礼研究に取り込む研究があつてもよいであろう。その一つの試みとして、『栄花物語』にみえる立后饗について検討してみたい。

立后儀は、内裏での立后宣下（狭義の立后儀）と、後宮から退下しているキサキの邸宅における饗宴（立后饗・本宮儀とも）から構成される。このような区別が生じたのは、藤原穩子の立后からであつた。^⑪すなわち立后饗の成立と展開は、摂関政治と密接に関連すると思われる。そして、その立后饗を『栄花物語』が「大饗」と記すことに注目したい。鈴木慎一氏の調査によると、平安仮名文学にみえる「大饗」三八例のうち、二九例は二宮大饗・大臣大饗に関する記事である。これが当時の認識の大勢であろう。残りの記事のうち四例が立后饗に関する記事であるが、それらはすべて『栄花物語』である（表参照）。^⑫

立后饗について古記録では「饗饌」「饗」などと記し、そのため『栄花物語』の諸註釈においても、「通常の饗はもたれているが、大饗が行われたことは確認できない」と頭注を付す。^⑬しかし、『栄花物語』の用法は単なる誤字や誤解で済まされる問題ではあるまい。歴代の立后饗に対し、特別な意図をこめて「大饗」と記しているのではなからうか。

立后饗は平安中期以降、三日間にわたりおこなわれるように変化する。『皇室制度史料』后妃二には、「本宮の儀は、皇后の御在所に冊命勅使が参入し、立后宣制の旨を宮司をして皇后に啓せしめ、王卿参賀拜舞して饗座に着し、

表『栄花物語』にみえる立后饗（本宮儀）と「大饗」記事との関係

巻	キサキ	三日間	「大饗」	天皇	父	他史料
1	藤原安子			村上	師輔	
1	昌子内親王			冷泉	朱雀	
2	藤原皇子			円融	兼通	
2	藤原遵子	△		円融	頼忠	『小右記』に三日間の記事あり
3	藤原詮子			円融	兼家	
3	藤原定子			一条	道隆	
6	藤原彰子		○	一条	道長	『権記』にも一日しかみえない
10	藤原妍子	△	○	三条	道長	『御堂関白記』に三日間の記事あり
10	藤原娥子			三条	済時	
14	藤原威子	△		後一条	道長	『小右記』『左経記』に三日間の記事あり。 『御堂関白記』にも二日間の記事あり
34	禎子内親王			後朱雀	三条	『行親記』に二日間の記事あり
34	*藤原姫子			後朱雀	頼通	
36	章子内親王	○	○	後冷泉	後一条	
36	藤原寛子			後冷泉	頼通	
39	*藤原賢子	○	○	白河	師実	

凡例：『栄花物語』の立后饗叙述における三日間の開催記事および「大饗」表記の有無を整理した一覧である。
みえない場合は空欄とした。
*は養女をさす。姫子は敦康親王女、賢子は源頼房を実父とする。
△は、『栄花物語』に三日間の実施はみえないが、他史料により三日間の立后饗開催が確認できることを示す。

賜宴・賜禄に預かるものであるが、平安時代中期以降盛大となり、立後の翌日および翌々日にも王卿参賀して賜宴・賜禄に預かっている。しかし江戸時代に於ける本宮の儀は当日のみに止まった¹⁵⁾とその概要を紹介する。
『栄花物語』にみえる「大饗」も、この盛儀化を反映した表記と考えられる。

立后饗と摂関政治との関係は、建築史研究においても注目されている。飯淵康一氏は、立后饗の室礼をめぐる次の事実に注目する。¹⁶⁾

史料1『小右記』長和元年（一〇二二）四月二十七日条
……女院立^{（詮子）}給皇后^{（後）}之日、有^{（遵子）}母屋饗。其後々立后饗皆用^{（後）}此議。四条宮立給饗座用^{（遵子）}庇。高麗疊上敷土敷・茵^{（後）}。彼時尋^{（後）}例所^{（後）}被^{（後）}行。但^{（後）}济時卿云、皆用^{（後）}円座云々。……（傍線筆者。以下同）

藤原娥子の立后にあたり、遵子と詮子の時の室礼が比較検討された記事である。これによると、遵子是对屋の「庇（廂）」を用いたのに対し、次の詮子は「母屋」を用い、それがその後の立后饗に踏襲されているという。同じ対屋の儀式であるが、「遵子の庇に対し、庇よりも

空間的格が高いと思われる母屋が主会場として用いられたのは、兼家の頼忠への対抗意識が背後に存在したからではなかっただろうか（傍線筆者）と、建築構造と当該期の立后争いを絡めた解釈を、飯淵氏は提示する。

建築史研究における寝殿造の構造の解明は、その多くを儀礼記事に拠ったことにより、儀礼運営の実態をも明らかにし、そのうえ儀礼のもつ政治的意味を建築構造や座の配置といった具体的な場面構成に即して指摘する⁽¹⁷⁾。母屋・廂（庇）・孫廂（庇）・簀子による室内空間の区分は、そのまま列座する者の身分秩序を可視化する装置であった。

飯淵氏は前述した立后儀の盛儀化についても、「管見によれば、二・三日目の饗宴について知られるのは、長和元年（一〇一二）二月十四日から三日間東三条殿で行われた女御妍子の「立后饗」の例からである」と指摘する⁽¹⁸⁾。立后饗を摂関政治の展開と絡めて理解する飯淵氏が三日間にわたる盛儀化にも注目している点は、本稿と視点を同じくするものである。

ただし、飯淵氏の指摘には事実と異なる点もあり、すでに藤原遵子の立后饗が三日間開催されている⁽¹⁹⁾。よって、兼家は詮子立后に際して、さきの遵子立后儀を凌駕する母屋の使用を実行したのであるが、それほど意識される頼忠の遵子立后儀もまた、盛儀化による政治的誇示につとめていたと考えられるのである⁽²⁰⁾。

このように理解するならば、藤原摂関家の栄華を主題とする『栄花物語』において、立后饗を三日間の儀として叙述すること、さらに「大饗」と表記することは、現実の摂関政治の展開を反映した叙述とみなすことができよう。表によれば、章子内親王・藤原賢子がそれにあたり、藤原妍子についても三日間開催されたことが他史料より確認できるので、「大饗」と表記することも頷けるところである。

逆に藤原遵子の場合、三日間の開催を確認できるにもかかわらず、その叙述も「大饗」表記もない。『栄花物語』が遵子立后を円融天皇の誤った判断とみなして批判的であることは周知の通りであり、そうすると意図的に叙

述べられなかったと考えられ、これもまた撰撰政治全盛期を反映した結果といえよう。²¹⁾

以上、本章では平安貴族社会研究の進展をもたらした古記録と儀式書、その中で克服対象とされた文学作品についても史料批判をおこない、留意すべき点を整理し、いずれも史料的有用性の再検討が必要な時期を迎えていることを指摘した。そして、これからの儀礼研究は、史料的有用性を精査しつつ儀礼史料の裾野を文学作品にも広げ、宮廷社会の政治文化を解明する方向に進むべきと考える。次章ではそのような取り組みとして、裳唐衣装束からみた政治文化について、文学作品を史料として論じてみたい。

二、裳唐衣装束にみる政治文化

(一) 裳唐衣装束への着目

裳唐衣装束とはその構成に基づく名称であり、論考では女房装束と称されることが多い。裳唐衣装束の基本史料である『満佐須計装束鈔』第一巻には、「もからぎぬ・こきはりばかま、これを女房のさうぞくといふなり」と明記する。上下の外装となる唐衣と裳を特徴とする装束であった。なお十二単が後世の俗称であることは、辞書や概説書でも指摘するところである。さらに、唐衣の下に着る桂の重ね着がもたらす重色目（襲色目）は、裳唐衣装束の美意識を象徴するものであり、『満佐須計装束』には、季節毎に定められた色目の故実が列記されている。

このような特徴をもつ裳唐衣装束の成立は、男性の束帯や直衣と同様に、中国に倣った奈良時代の朝服や制服が、平安中期に至り和様化したものと考えられている。

これに対し本稿では、服飾史の立場から提示された増田美子氏の研究に注目したい。²²⁾ 増田氏は、「奈良朝の朝服や制服形式の服飾をベースとし、これらの下に重ねる衣服が増大したことにより平安中期以降の唐衣裳装束が成立したとは考えがたい」という観点から、ロングスカート状の裳から引裳への転換および桂姿が史料に見える始める記

事を再検討する。表向きの場における服装が、内に着る服飾の増大・変容により成立するとは考え難いという視点や、重ね着を特徴としつつも、それまで重ね着がみられた唐衣や裳に相当する服飾部位は、唐衣や裳となると重ね着されなくなるとの指摘は、服飾史研究ならではの着眼であり興味深い。結論として増田氏は、重桂は本来「家居の日常着」として成立したものであり、その上に唐衣・裳をかつてのように重ね着することなく装い出仕することが、一〇世紀半ば以降に始まり、一一世紀に定着したのだという。

また、近藤好和氏は男性装束との違いを論じる中で、平安宮廷の女性には規定に履物がないことより、それが室内着であることを端的に指摘する⁽²³⁾。

このように捉えるならば、裳唐衣装束は、住宅建築である寢殿造が儀礼の場として成立し、かつ里内裏が多くなる平安中期以降の動向と相俟って、女性の家居の日常着が宮廷社会の表向きの装束に肥大化し成立したと考えられ、服飾の問題に留まらない時代の流れの中で理解することができるであろう。

(二) 裳唐衣装束が可視化する秩序

裳や唐衣の着脱、唐衣の色や地紋の有無が、女房どうしの上下関係や女房の意思を示していることは、平安女流文学に多々叙述されるところであり、文学研究でも指摘されている⁽²⁴⁾。野村倫子氏によれば、裳は「女房という身分を強調する」服飾であった。また、入内して女御や中宮となった娘の前では、その母が裳を着することで、キサキと臣下との秩序を可視化することもあった⁽²⁵⁾。

史料2 『源氏物語』 若菜・下

……かかる御あたりに、明石は気おさるべきを、いとさしもあらず。もてなしなど気色ばみ恥づかしく、心の底ゆかしきさまして、そこはかとなくあてになまめかしく見ゆ。柳の織物の細長、萌黄にやあらむ、小桂着

て、羅の裳のはかなげなるひきかけて、ことさら卑下したれど、けはひ、思ひなしも心にくく侮らはしからず。
……

明石は本来であれば小桂姿でよいのであるが、この場では裳を着用することで「ことさら卑下し」、今は女御となつた女、明石の姫君への臣下の礼をとるのである。

史料3『枕草子』第二六〇段、関白殿二月二十一日に法興院の

……女院の御棧敷、所々の御棧敷ども見たしたる、めでたし。^(道隆)殿の御前、このおはします御前より院の御棧敷にまゐり給ひて、しばしありて、ここにまゐらせ給へり。……入らせ給ひて見たてまつらせ給ふに、みな（能因本では「女房あるかぎり」）御裳・御唐衣、御匣殿までに着給へり。殿の上は裳の上に小桂をぞ着給へる。絵にかいたるやうなる御さまもかな。いま一人は、今日は人々しかめるは、と申し給ふ。三位の君、宮の御裳ぬがせ給へ。この中の主君には、わが君こそおはしませ。御棧敷の前に陣屋据ゑさせ給へる、おぼろげのことかは、とてうち泣かせ給ふ。……

中宮定子の棧敷において、関白道隆の妻であり中宮定子の母である高階貴子は、小桂姿に裳を着けることで、定子に謙讓の意を示している。

一方の中宮定子は、積善寺への女院行啓から参加しているので、女院への敬意から裳唐衣装束であり、棧敷においてもそのままであった。そうすると居並ぶ女房たちと同じであり、母高階貴子と逆転した服飾となつてしまう。女院の棧敷から戻つてそれに気づいた道隆は、「この中の主君には、わが君こそおはしませ」という理由により、定子の裳を外させるのであった。冗談めいた言動で場を和ませつつも、裳唐衣装束が主従の秩序を可視化する服飾であることについて、道隆は明確に自覚しているのである。

史料4 『紫式部日記』

……（敦成親王の）御五十日は霜月の朔日の日。例の、人々のしたててまうのぼりつどひたる御前の有様、絵にかきたる物合の所にぞ、いとうよう似て侍りし。……

今宵、少輔の乳母色ゆるさる。ただしきさまうちしたり。宮抱きたてまつれり。御帳のうちにて、（敦成）殿の上抱

きうつしたてまつりたまひて、ぬざり出でさせたまへる火影の御さま、けはひことにめでたし。赤いろの唐の

御衣・地摺の御裳、うるはしくさうぞきたまへるも、かたじけなくもあはれに見ゆ。（源倫子）大宮は葡萄染の五重の御

衣・蘇芳の御小桂たてまつれり。（道長）殿、餅はまゐりたまふ。……

敦成親王の御五十日の儀が、外祖父道長の差配のもと、多くの女房が奉仕する中でおこなわれた。『紫式部日記絵巻』にも描かれる場面であり、女房たちは裳唐衣装束である。母である中宮彰子は蘇芳の小桂姿であった。少輔の乳母が抱いて連れてきた若宮を、道長の妻であり祖母にあたる源倫子が抱いている。その装束は裳唐衣装束である。

源倫子の装束について、萩谷朴氏は中宮彰子への敬意とみなし、（26）野村氏もこれに従うが、倉田実氏は若宮を抱く役ゆえに裳唐衣装束であったと解釈する。（27）女房たちも陪膳として若宮に直接関わる者は髪上げ姿、そうでない女房は垂髪で描かれ区別される。そのような中で倫子は小桂姿に裳を着用するのでなく、裳唐衣装束なのである。よって、この場面では倉田氏の指摘するように、若宮を直接抱くことから、裳唐衣装束によってより強い敬意を示したと考えるのが妥当であろう。

以上のように、キサキ、その母、そして女房たちの間で、裳唐衣装束は後宮の秩序を可視化する装束であった。さらに、裳唐衣装束の着用が政治史を反映する事例にも注目したい。片岡智子氏は院政期の事例より、興味深い事実を指摘する。（28）

史料5 『建礼門院右京大夫集』(三番歌の詞書)

同じ春なりしにや、建春門院内裏にしばし候はせをはしましが、この御方へ入らせおはしまして、八条の

二位殿御参りありしも御所に候はせたまひしを、御匣殿の御後ろより、おづおづちと見まゐらせしかば、女院、

紫のにはひの御衣・山吹の御表着・桜の御小桂・青色の御唐衣、蝶をいろいろに織りたりし召したりし、言ふ

方なくめでたく、若くもおはします。宮は、つぼめる色の紅梅の御衣・樺桜の御表着・柳の御小桂・赤色の御

唐衣、みな桜を織りたる召したりし、にほひあひて、今さらめづらしく言ふ方なく見えさせたまひしに、大方の御所の御しつらひ、人々の姿まで、ことにかかやくばかり見えし折、心にかく覚えし。

承安四(一一七四)年の春、後白河院の女御建春門院と中宮徳子の二人は対面に際してともに、小桂姿の上に唐衣を着ている。小桂姿に裳を着用するのと同様に、相手への敬意を示すものであろうが、これは新しい風潮らしい。そのことを次の藤原頼長の日記より指摘する。

史料6 『台記別記』卷第三(婚記) 久安四年(一一四八) 九月二八日条

(養女多子の入内準備に際し)使_{仲行}申_{禪閤}曰、著_{唐衣}之時、著_{小桂}乎。帰来曰、禪閤不_レ悟。仍問_ニ

女_院々々仰曰、故_四条_{宮寛子}太后曰、著_{唐衣}之時、不_レ著_{小桂}。著_{小桂}之時、不_レ著_{唐衣}。是礼也。詣_ニ神

社_ニ及_ニ奉幣之時、著_{唐衣}、不_レ著_{小桂}。

頼長によつて小桂姿に唐衣を着用することは是非が確認される。はじめに父忠実に尋ねるも判明せず。ついで高陽院泰子に問うたところ、唐衣と小桂を同時に着用することはなく「是礼也」と明言され、それは四条宮寛子からの口伝であるという。さらに神社に参詣し奉幣する際は、唐衣を着るのであり、小桂ではないともいう。唐衣を着ることは略礼装であるが、それは小桂姿に重ねるものではないことがわかる。

史料5・6について、片岡氏はそれぞれの立場を読解する。頼長の養女多子は平氏台頭前夜にあつて、道長以来

の藤原氏の伝統を負って入内した、典型的な摂関期以来の後妃であった。そのため頼長の方針で『御堂関白記』の記述や彰子入内の先例が重用された。そうした中での質疑である。道長以来の有職故実を院政期まで伝えたのは、四条宮寛子（頼通女）であり、高陽院泰子（忠実女）であった。後宮とりわけ女院の世界に、摂関期の服飾故実は継承されていたのである。

史料6は一方で、小桂姿に唐衣を重ねる略礼装が当時流行していた証でもある。史料5はその実例といえる。二人はともに平氏出身であり、新しい風潮を体現しているのである。頼長がこの重ね着に留意し、慎重に父祖例を確認するのも、摂関家以外の新しい風潮を意識してのことだったのである。

このように、裳唐衣装束をめぐる摂関政治と平氏政権という対比や、摂関家故実を伝える女院の世界を読解する点で、片岡氏の指摘は興味深い。裳唐衣装束の担った政治的文化的意味を再認識し、その成立と展開を考える必要があるといえよう。

（三） 宮廷儀礼とキサキ・女房との関わり

前述のように大津氏は、平安中期の通史を書くにあたって『源氏物語』にほとんど触れなかったのであるが、近年、道長政権がもたらしたキサキ・女房の饗宴参加と『源氏物語』との関係に論及する。節会に類する「宴」が、東三条殿の母屋に「中宮御在所」、北廂に「女房候所」をとめない開催された例を取り上げ、この道長の創意が、宮廷行事を後宮や女房を含む世界に拡大したと評価するのである。そして「宮廷文化の基盤を後宮世界へと拡大したことに道長の歴史的意義があり」、『源氏物語』の目指す王権のあり方は、道長の文化的側面と共通するという。

さらに講演記録である別の論考では、平安貴族社会研究が古記録や儀式書の読解により説明してきた道長期の政治運営を紹介した上で、「これは紫式部とは関係はないでしょう。こうした側面は紫式部は知らないでしょうし、

そういうことは物語には書かないのが伝統なのでしょう」とやはり一線を画しつつも、文化については道長が「和歌に代表される女性を含む文化を歴史の表舞台に引き立て、『栄花物語』はそのことを記録しているのです」⁽³⁰⁾という。

道長の展開した宴の見物や文化政策は、女房たちに一定の体験をさせ、それが『源氏物語』や『栄花物語』の宮廷社会像に反映された。とするならば、道長期の宮廷儀礼を読み解く素材として、これら作品が史料の有用性を備えていると考えてよいことになるであろう。

ただし、後宮世界や女房を含み込んだ宮廷儀礼の拡大は、道長個人の才覚のみで成立したのではあるまい。たとえば、キサキや女房に見物させることについては、すでに父兼家のときに次のようなことがみられる。

史料7『栄花物語』巻三、さまざまのよろこび

……はかなう年暮れて、今年をば正暦元年といふ。正月五日、内の御元服せさせたまふ。さしつづき世の中间
(兼家)
いそぎたちたるに、摂政殿、二条院にて大饗せさせたまふ。造りたてさせたまへる有様、えもいはずおもしろ
うめでたければ、本意あり、うれしげに思し興せさせたまふ。一条の右大臣(為光)、尊者には参りたまへり。目もは
るかにおもしろき院の有様にぞ。えもいはぬ東の対には、内大臣殿住ませたまへば、やがて姫君たちなどもの
御覧ずれば、こと殿ばらも御覧ずべう申させたまへど、聞しめし入れず。(為尊・敦道両親王)宮々　いとうつくしきに小男
どもにておはします。……

摂政兼家の正暦元（九九〇）年正月大饗を、同じ二条院に住む道隆やその娘たちも見物している。当然女房たちも祇候しつつ見物したであろう。臣下邸における饗宴を通じて妻女、のちのキサキや女房に、宮廷儀礼の場を拡大させた道長期には、その前史があったのである。

さらに、あわせて留意すべき建築史や服飾に関する研究成果もある。前述のように川本氏は建築史の立場から、

寢殿造が日常の住まいではなく、儀礼の場として成立したことを指摘し、里内裏儀の増加や大臣大饗の成立など、平安中期以降の宮廷儀礼が、寢殿造住宅で展開している事例を分析する。³¹⁾

福家俊幸氏は、文学研究の立場から『紫式部日記』における服飾描写の方法を追究する。『紫式部日記』の服飾描写が、女房の視線に支えられている事実注目し、裳唐衣装束の禁色に強い関心を抱くこの作品では、その遵守が「すぐれた女房集団の証であり、また統括者たる中宮の手腕を示すものであった」と読解する。³²⁾ また、この作品以前と以降では、禁色の用例が女御・更衣から女房階級の身分制度へと移行するという片岡智子説に依拠し、裳唐衣装束の禁色への意識が「彰子中宮の時代から強まった」ことを指摘する。そして、その背景として「それまで宮仕えに上がることなど考えられなかった、身分の高い出自の娘を女房として招聘」するという「女房史の転換期」が、彰子後宮からであったことに論及する。³³⁾

以上のように、一〇世紀後半から道長政権期にかけての文化政策・後宮政策は、身分秩序を可視化する装置としての寢殿造建築、宮廷女性の序列を可視化する裳唐衣装束の展開と一体となり、彩りある儀礼空間と後宮世界を創出した。キサキや女房の存在や裳唐衣装束についても、当該期の政治動向および宮廷儀礼と関連づけた考察が必要なのである。

(四) 『栄花物語』にみる裳唐衣装束

ここまで文学作品の史料の有用性およびキサキや女房たちの装束が担った政治的文化的意味について論じてきた。そのことを『栄花物語』にみえる裳唐衣装束叙述から考察してみたい。

史料 8 『栄花物語』 卷三十六、根あはせ

……紅の御単襲、白き織物の御衣・裳、白きを奉りて、額ばかり上げておはします御有様、いみじうめでた

し。かたはにものしたまはん人の、居丈高に髪すくなにて、倚子の御座に上りたまはんは、見苦しうやあらまし。ほのかなる火影などめでたきは著きことにぞ。拝礼など、いとめでたし。池の篝火隙なきに、白き鳥どもの足高にて立ても、蘆手の心地してをかし。

立后饗に際しキサキは正装として裳唐衣装束を着用するきまりであつた（『江家次第』巻第十七、立后事）。その立后饗における章子内親王の服飾を、同じ御簾内の女房の目を通して「いみじうめでたし」と叙述する。このように儀礼の时空の美意識を象徴するものとして、裳唐衣装束はあるのである。一方で内裏から移動してきた公卿の拝礼や庭の様子も、御簾越しの光景として叙述されている。

史料 9 『栄花物語』巻三十六、根あはせ

……女房は、その夜は朽葉の单襲・桔梗の表着・女郎花の唐衣・萩の裳。またの日は紅の单襲・女郎花の表着・萩の唐衣・紫苑の裳。またの日は桔梗・朽葉・女郎花・紫苑などを、六人づつ織り单襲、やがて同じ色の織物の表着・裳、唐衣は栄へぬべき色どもをかへつつ着たり。さまざまの浮線綾、二重文など、心々に挑みたり。色聴されぬは金して羅鈿し、絵かき、繡物など、いみじうもの狂ほしきまでしつたり。筋遣り、口置き、袴の剛きに金して、繡物にも打袴をしたる人もあり。その心ばへある歌を繡物にもしたり。劣らじと挑みたり。……

章子内親王の三日間にわたる立后饗を叙述するにあたり、その内容は女房たちが三日間にそれぞれ趣向を凝らして着用した装束である。そして禁色の女房とそうでない女房とを二分して装束の詳細を叙述する。すなわち裳唐衣装束の詳細は、立后饗の盛儀のさまと後宮の秩序を可視化するものであり、『栄花物語』はその歴史事実をふまえて叙述しているのである。

史料10『栄花物語』卷三十六、根あはせ

……無量寿院に、関白殿の御堂建てさせたまへれば、供養に女院・鷹司殿の上渡らせたまふ。(祐子内親王)一宮・殿の上具したてまつらせたまひて渡らせたまふ。(章子内親王)中宮も出でさせたまふ。内裏よりやがて昼出でさせたまふ。さきざき古りにしことなれど、なほめでたきことになん。榊桜、みな織物なるが裏打ちたる六つばかり、御裳・唐衣奉りておはします御有様、えもいはずめでたく見えさせたまふ。御輿の後にはやがて三位さぶらひたまふ。皆紅の打ちたる、桜の織物の表着に、その折枝織りたる藤の織物、桜萌黄の唐衣、皆二重文にて、折枝けざやかに織りたり。

女房は、桜どもに、萌黄の打ちたる、山吹の二重織物の表着・藤の唐衣、萌黄の裳に絵かき、繡物し、羅鈿し、口置など、目もあやに、「心のゆきて」などいふ歌を、金の具のちひさを造りて、歌絵にて桜の咲きこぼれたるかたをかきたり。「玉と貫ける青柳」など、いとをかし。またしつらひのかたをして、帳台・唐櫛笥、昼の御座のかたをしたる人もあり。「花の鏡となる水は」とて、いとをかしげなる鏡を池に押したる人もあり。……

無量寿院供養において、中宮章子内親王は裳唐衣装束であり、桂は「六つばかり」重ねている。このち「五つ」に規制される重桂も、この頃はまだ特別なときに「六つ」が許容されていた(後掲史料11の頼通や道長の言にもみえる)。それは「えもいはずめでたく見えさせたまふ」と評される。女房たちは『古今和歌集』の歌心を、金具を使い、絵を描き、玻璃の玉を貫き、鏡を付けるなどして表現しており、詩歌の意匠をまといっている。⁽³⁶⁾

ここでも儀式の様子にはほとんどふれず、女房たちの装束叙述に終始する。それが『栄花物語』続編の特徴の一つと指摘されているが、⁽³⁶⁾文学作品上の方法にとどまる問題ではあるまい。当該期の宮廷社会が裳唐衣装束の担う秩序と美意識に政治的文化的意味を見出していたのであり、宮廷女流文学は御簾内の女房の視点でそれを記録したの

であろう。

裳唐衣装束がキサキや女房たち後宮世界の問題にとどまらないことを示唆する、次のような逸話もある。

史料11『栄花物語』巻二十四、わかばえ

(道長)

……(頼通は妍子に諫言するなかで)、今御堂に今日の事ども問はせたまはば、この女房の衣の数により御勘当はべらんずらんと思ひたまふこそ、いと苦しうさぶらへ。宮々によきことさぶらへば、うち笑ませたまひて、いとよしと思しめしたり。かやうの例ならぬことさぶらへば、まづ追ひたてさせたまふに、いと軽々にさぶらふや。大宮・中宮は、女房のなり六つに過ぐさせたまはねばいとよし。この御前なん、いとうたておはしますとこそはつねにさぶらふめれなど、申おかせたまひて、出でさせたまふ。女房たちゐすくみて、立つ心地いとわびし。おのおのさるべきには陣に車率てさわぎ、さらぬは局々に皆行きて、ものもおぼえて寄り臥しぬ。かくて、その夜も更けぬれば、またの日、御堂より、関白殿疾く参らせたまへ、とあれば、何ごとにかとて、急ぎ参らせたまへれば、世間の御物語なりけり。司召今日・明日になりぬれば、さやふのことどもなるべし。

(妍子)

(頼通)

かうていかにぞや。昨日の宮の大饗いかがありし、と問ひきこえさせたまへば、はべしやうしかじかと、いちいちに申させたまへば、いと心よううち笑ませたまひて、さてさてと問ひきこえさせたまひて、女房のなりなど問ひかからせたまひて、ありしことどもを聞えさせたまへば、いみじう腹だたせたまひて、あさまじうめづらかなることどもなりや。衣は七つ八つをだにやすからぬことと思へば、中宮・大宮などにはみな申し知らせて、いみじきをりふしにもただ六つと定め申たるを誤たせたまはぬに、この宮こそ事破りにおはしませ。すべてすべてさらにさらにうけたまはらじと、過ぎにたることをのしらせたまふも、さすがにをかしと思さる。さるにても大臣はかうやはいますがるべき。朝廷の御後見はいかなる人のするわざぞ。なでふさることを見てただにある人があるなど、いとおどろおどろしうむつからせたまふ。いとわりなき勘当なりとぞ申たまふ。

彰子に比べた妍子とその女房たちの奔放さ、道長による頼通勘当の逸話を伝える叙述として知られる、万寿二（一〇二五）年正月二三日皇太后妍子大饗の後日談である。

頼通が妍子を訪れ、女房たちの重桂の過差について、彰子や威子の女房は六つをこえないのに、妍子の女房のみが過差であることを諫言している。それは父道長が常々懸念していることであり、よって今回のことが道長に知られると勘当されるだろうという。それを聞いた女房たちはすっかり心地を失った。

次の日、頼通が道長から呼び出された。二人の話題は世間の物語に始まり、除目のこと、先日妍子大饗へと続く。その報告を聞いた道長は「いと心よううち笑ませたまひて」いたが、その際の女房装束のさまを問うと、頼通の答えに「いみじう腹だたせたまひて」事態は一変する。ここで妍子や女房でなく頼通が勘当されること、および道長の発言内容に留意したい。

そもそも道長からの冒頭の話はいわば話のまくらであり、道長が頼通を呼び出した理由がこの勘当にあることは、容易に想像できるであろう。そして、彰子や威子の女房が暗れの間であっても重桂を六つまでとしているのは、「定め申たるを誤たせ給はぬ」、すなわち道長が定め申し、彰子や威子もその意を汲んで遵守していることであつた。キサキ付きの女房の裳唐衣装束をその背後で統制しているのは道長なのである。そのために妍子の件は、現関白左大臣である頼通の責と判断されるのであろう。今回の妍子の女房たちの奔放さは、実資たち上達部も驚くほどであり、道長の耳にも達していたであらう。そこで頼通に対し、「公の御後見はいかなる人のするわざ」と、朝廷を後見する立場なのにそれらを統制できていないと叱責するのである。

前述のように、女房たちの裳唐衣装束を統制することは、主人であるキサキの統率力を象徴するのであり、中宮彰子はその術に長けていたことは『紫式部日記』に記すところである。それはさらに朝廷の後見である摂関の最たる務めの一つであつたことを、史料11は示しているのである。

また、後一条天皇即位式に際し、皇太后彰子と摂政道長とに、次のようなやりとりがみられた。

史料12『御堂関白記』長和五(一〇一六)年二月六日・七日条

(源倫子)

……明日女方礼服仰_ミ資業_一。而聞_ミ宮被_レ調由_一不_レ調者。驚忽調_レ之。(六日条)

(倫子)

……曉母々参_ミ八省_一。宮御装束、青色唐御衣、地摺御裳。母々同_レ之。御理髪一本。(七日条)

即位式には、母后である彰子に加え、その母であり道長妻である源倫子も参入することになっていた。その「礼服」を資業に命じた道長は、彰子方で調進すると聞いていたために用意していないとの報告を受け、驚き慌てて調進したという(六日条)。倫子・彰子母子は当日、裳唐衣装束で参加している(七日条)。

宮廷儀礼を運営する道長が裳唐衣装束を「礼服」と称し、時空を彩る正式な服飾と認識していたことが窺える。そして倫子の装束を調進するのが彰子方であると資業に認識されていたこと、道長方より確認がなされ、かつ急ぎに調進可能であったことは、単に娘か夫かという問題ではなく、宮廷儀礼に参入する女性の裳唐衣装束は、キサキや摂関で統制することになっていたためと考えられるであろう。

以上、本章では、裳唐衣装束が担った政治的文化的意味を追究し、いくつかの事象について再検討してきた。裳唐衣装束は本来、家居の服装であった女性装束が、しだいに表向きの和様の装束として肥大化し成立した。一〇世紀半ば以降から一一世紀にかけてのことである。それは即位式で母后やその母の着る「礼服」と認識される地位を確立するに至る。裳や唐衣の着脱、色や地紋の有無、小桂姿との対比などによって、キサキと女房、女房どうしの序列を可視化し、また主人であるキサキの統率力をはかる指標ともされた。

このように裳唐衣装束は、平安中期の政治的文化的趨勢を象徴する服飾であったが、それは後宮世界に留まる問題ではない。天皇の外戚として朝廷を後見し政治を領導する摂関にとつて、自家の息女であるキサキとその女房たちの装束を統制することは、自ずと重要な務めであった。道隆は裳唐衣装束の政治的文化的意味への自覚に基づい

て裳の着脱を差配した。道長の頼通への勘当も同様の自覚に基づく叱責であった。院政期の唐衣をめぐる新たな風潮は、外戚政策を政権基盤とする平氏政権にとつても、同様に政治文化的意味が認識されていたことを示している。頼長が摂関家故実に執着したのも、それに対抗する意味から生じたことであろう。

そして、この時期に成立する宮廷女流文学は、御簾内ならではの視線で装束の詳細を捉え、宮廷儀礼における主人の素晴らしさや盛儀のさま、後宮世界の魅力を生き生きと叙述した。それもまた兼家や道長によつて設けられた饗宴の見物がもたらしたものであったのである。

おわりに

平安貴族社会研究のこれまでの成果に学びつつ、政治文化を捉えるためのこれからの宮廷儀礼研究について考察した。第一章では史料批判をキーワードに、古記録や儀式書の再検討に加え、文学作品の史料的有用性に着目する必要性を論じた。第二章では文学作品の叙述を検討し、裳唐衣装束の色と形が担った政治的文化的意味を読み解くことで、当時の政治文化を捉える試みである。

裳唐衣装束に彩られた儀礼の時空は、一〇世紀後半から一一世紀にかけて創出され、その統制は主人であるキサキと朝廷を後見する摂関の務めであった。裳唐衣装束に象徴される後宮世界は、摂関政治における政務手続きや節会など朝廷政務や儀礼の世界と両輪であり、摂関政治全盛期がもたらした美意識をとまなう世界なのである。

王朝美を体現し摂関政治を政治的文化的に象徴する裳唐衣装束は、平氏政権下にも受け継がれた。服飾自体はさらに肥大化し爛熟の域に達したが、宮廷女性装束による点は共通する。外戚政策を政治基盤とする政権にとつて、宮廷儀礼における裳唐衣装束ひいては後宮世界を統制することは不可欠の課題であり、その文化を領導しながら宮廷儀礼を運営することが、一〇世紀後半の摂関政治から院政・平氏政権の時代に共通する政治文化であったのであ

る。

裳唐衣装束が政治文化の象徴となったとき、その細部にわたる違いや美を描写することは、参列している男性貴族には不可能であり、その役割を担ったのは御簾内に祇候する女房の目であった。儀礼の記述が服飾描写によって代替される時期は、『紫式部日記』から『たまきはる』あたりまでであろうか。なぜこの時期の文学に宮廷女房を担い手とする、宮廷を舞台とする作品が輩出し、ともすれば服飾ばかりが叙述されるのか。それは主家に仕える宮廷女房がその権勢を叙述することになったとき、服飾叙述が統率者であるキサキや摂関を讃えることにつながるからである。そのようにして生まれた作品もまた、外戚政策を政治基盤とする時代の政治文化の一面であったといえる。

(付記)

講演会のテーマは「儀礼の威光」であった。あるいは盛大に催される儀礼の中で天皇や摂関が自らを誇示した光景を期待されていたかもしれない。儀礼一般に対するイメージはそういうものであろう。しかし、平安宮廷儀礼において摂関は、臣下に相対する側へと転じ、天皇の御後に祇候することで権威を示した。儀礼の場も広大な朝堂院から内裏や大臣邸に移行し、序列や秩序は寝殿造の内部構造と座の配置、御簾内でキサキや女房が重ね着した服飾によって可視化された。このように時空的には狭小化したのが、建築・服飾などが一体となった宮廷儀礼の中で、天皇や摂関は確かに権威をまとうていた。それらを美的に叙述した文学作品や絵画もまた平安宮廷儀礼の威光の産物であった。

このような事実を、宮廷儀礼研究のこれからを追究する形で論じたため、テーマとの関連がわかりづらかったかもしれない。この場を借りてお詫びするとともに、講演の機会を与えてくださった鷹陵史学会事務局に御礼申し上げます。

げます。

註

- (1) 拙著『平安宮廷の儀礼文化』（吉川弘文館、二〇一〇）。
- (2) 当日の講演では、貴族社会の衣食住に関する先行研究や資料を、スライドを多用して紹介したが、本稿でそれら図版の引用は難しく、儀礼研究のこれからを中心に論じることとし割愛した。
- (3) 小島小五郎「先例尊重」（『公家文化の研究』育芳社、一九四二。初出は一九三四。国書刊行会より一九八一復刻）。
- (4) 龍福義友「平安中期の例」（『日記の思考―日本中世思想史への序章―』平凡社、一九九五。初出は一九七七）。
- (5) このことは前掲註(1)拙著「はじめに」においても指摘した。
- (6) 割注に着目して当該期の政治動向と儀礼との関係を考察した拙稿「『内裏式』にみえる上卿代役規定について」（『福岡大学人文論叢』三五―一、二〇〇三）では、一上を原則とする内弁を参議以上の者が勤仕可能と注記した意味を、当該期の宮廷人事と関連づけて論じた。また、『江家次第』の割注が、それまでと異なる平安後期の大匠大饗の変容を的確に記していることに着目し、儀礼史料論の広がりや拙稿「江家次第（大江匡房）―歴史史料としての『江家次第』論―」（松蘭斉・近藤好和編『中世日記の世界』ミネルヴァ書房、二〇一七）において追究した。拙稿「『大鏡』にみる大匠大饗」（和田律子・久下裕利編『平安後期 頼通文化世界を考える』武蔵野書院、二〇一六）では、『江家次第』の内容に近接していることに着目して、『大鏡』の良房大饗が平安後期の認識にもとづく創作であることを指摘した。
- (7) 大津透『日本の歴史06 道長と宮廷社会』（講談社、二〇〇一）。
- (8) 大津氏前掲註(7)著書文庫版（講談社学術文庫、二〇〇九）。
- (9) 倉本一宏「栄花物語」（『日本史の研究』二五〇、山川出版社、二〇一五）。
- (10) 小嶋菜温子・長谷川範彰編『源氏物語と儀礼』（武蔵野書院、二〇一二）。
- (11) 池田尚隆「『栄花物語』の即位儀礼をめぐる」（『国語と国文学』六八一―一、一九九一）。
- (12) 伴瀨明美「摂関期の立后儀式―その構造と成立について―」（大津透編『摂関期の国家と社会』山川出版社、二〇一六）。
- (13) 鈴木慎一「平安時代の『大饗』―仮名作品を主文献として―」（『国文鶴見』三九、二〇〇五）。
- (14) 新編日本古典文学全集『栄花物語』①、巻第十、ひかげのかづら、における藤原妍子立后の叙述に関する頭注（五〇五頁）。なお院政期の古記録になると立后饗をさして「大饗」と記す記事もみられるようになる。

- (15) 『皇室制度史料』后妃二(吉川弘文館、一九八八)。
- (16) 飯淵康一「対の儀式空間に関する研究―立后饗について―」(『続平安時代貴族住宅の研究』中央公論美術出版、二〇一〇。初出は二〇〇八)。
- (17) 飯淵康一『平安時代貴族住宅の研究』(中央公論美術出版、二〇〇四)および同氏前掲註(16)著書、川本重雄『寝殿造の空間と儀式』(中央公論美術出版、二〇一二)。
- (18) 飯淵氏前掲註(16)論文。
- (19) 『小右記』天元五(九八二)年三月一―一三日条。『皇室制度史料』后妃二、に整理された史料および頭注を通覧すると、藤原妍子からの変化と読めるため注意を要する。
- (20) 東海林亜矢子「女房女官饗禄―女性官人と后―」(『平安時代の后と王権』吉川弘文館、二〇一八。初出は二〇〇七)によれば、入内した皇后遵子の曹司である弘徽殿において、女房女官に饗禄が賜れた。それは天皇付きである上女房にまで及んでおり、立后二ヵ月後におけるこの女房女官饗禄は、「皇后が後宮を治める内治制を示す儀礼」であったと指摘する。遵子立后が政治的に大きな出来事であったことを、こうした点からも窺うことができる。
- (21) 『栄花物語』の「大饗」については、前掲註(13)鈴木論文より以前に、加藤静子「立后の大饗記事から―『栄花物語』正編作者の位相―」(『王朝歴史物語の生成と方法』風間書房、二〇〇三。初出は二〇〇二)による興味深い分析があり、『栄花物語』の作者や作品分析にもつながる問題でもある。本稿においても、「大饗」と記す場合(彰子)とそうでない場合(威子)について検討の余地を残している(表参照)。これらの点は稿を改めて検討したい。
- (22) 増田美子「和様の成立過程―唐衣裳装束を中心に―」(『国際服飾学会誌』二八、二〇〇五)。
- (23) 近藤好和・武田佐知子・河添房江「対談 王朝文学と服飾」(河添房江編『平安文学と隣接諸学』9 王朝文学と服飾・容飾 竹林舎、二〇一〇)の中の近藤氏発言(一九頁)より。これに対し『養老衣服令』朝服条には女性にも「白襪。烏皮履。」と履物を規定する。
- (24) 宇都宮千郁「『紫式部日記』中「織物ならぬをわろしとにや」に関する一試論―平安中期における女房装束の禁制について―」(『日本文学』四六―二、一九九七)、畠山大二郎「『紫式部日記』における装束の諸相―「無紋の青色に桜の唐衣」を中心として―」(『服飾美学』六二、二〇一六)など。
- (25) 野村倫子「女房装束(裳・唐衣)から見た女房達―正編・宇治十帖、そして浮舟―」(上原作和編『人物で読む源氏物語 大君・中の君』勉誠出版、二〇〇六)。
- (26) 萩谷朴『紫式部日記全註釈』上巻(角川書店、一九七二)。
- (27) 倉田実「絵巻で見る平安時代の暮らし第8回『紫式部日記絵巻』「敦成親王五十日の祝へ」を読み解く」(三省堂ホームページ <https://dictionary.sanseido->

publ.co.jp/column/emaki8)。

- (28) 片岡智子「有職学試論」(『古典研究』一一、一九八四)、同「建礼門院右京大夫集」における服飾表現」(『ノートルダム清心女子大学紀要』国語・国文学編八一、一九八四)。
- (29) 大津透「節会と宴―紫式部の描く王権―」(山中裕編『歴史のなかの源氏物語』思文閣出版、二〇一一)。
- (30) 大津透「藤原道長の歴史的意義」(『むらさき』五〇、二〇一三)。
- (31) 川本氏前掲註(17) 著書。
- (32) 『紫式部日記』の女房装束をめぐる叙述が、主人彰子の統制力を示しているとの指摘は、宇都宮・畠山両氏前掲註(24)論文にもみられる。
- (33) 片岡智子「禁色」・「色ゆるさる」考―『源氏物語』ゆるし色考の一環として―」(『ノートルダム清心女子大学紀要』一九八九)。
- (34) 福家俊幸「服飾描写の方法」(『紫式部日記の表現世界と方法』武蔵野書院、二〇〇六。初出は一九九七)。
- (35) 清田倫子「平安盛期以後の女房晴装束の意匠とその史的環境」(『宮廷女流日記文学の風俗史的研究』中央公論事業出版、一九八一。初出は一九七四)。
- (36) 新編日本古典文学全集『栄花物語』③、卷第三十六、根あはせ、三六〇頁頭注。
- (37) 清田氏前掲註(35)論文。